

## エコフィロソフィの探求—自然観から倫理へ—

間瀬 啓允

### はじめに

エコフィロソフィは相互依存の関係を重視する「エコロジー」と、自分の頭で考えることを重視する「フィロソフィ」を結んでできた言葉である。それは「自然」「人間」「宗教」を三位一体として扱う現代の、21世紀文明哲学の創造に与する知的活動である。それはポーランド出身の哲学者ヘンリック・スコリモフスキー（現、ミシガン大学名誉教授）の著書 *Eco-Philosophy: Designing New Tactics for Living* (Marion Boyars, N.Y. & London, 1981) に始まる。同書には「人と人、人と自然の相互関係を扱う新たな哲学をもってエコフィロソフィという」と明記されていた。1984年、私は同教授をミシガン大学に訪ね、以来、親しく研究交流を続けた。

### 思考のパラダイム変換としてのエコフィロソフィ

1980年代といえば、近代の科学技術の進歩によってもたらされた種々の由々しいエコロジカルな問題をまえにして、進歩の終焉とか、自由の制限とか、科学のモラトリアムとか、声高に叫ばれた時代であった。当時、私はそうした問題の根底にある宗教的・道徳的・形而上学的なものの見方・考え方を吟味し、自然と人間の関係、とりわけ人間中心主義的な自然理解あるいは人間優位の価値観に基づいた自然理解に対して批判的な考察をおこなっていた。その結実として『エコフィロソフィ提唱—人間が生き延びるための哲学—』（法蔵館 1991年）を出版することができた。その内容は環境の哲学・生命の倫理・宗教の多元主義から成る三位一体型の、私のエコフィロソフィであった。

翌1992年、スコリモフスキーの新たな著書が出版された（*Living Philosophy: Eco-Philosophy as a Tree of Life*, Penguin Books, London, 1992）。これは21世紀に

向けての新たな、グローバルな文明の在り方を示唆し、合わせて新たな文明の創造としてのエコフィロソフィを提唱するものであった。当時、慶応大学の院生であった矢嶋直規君（現、敬和学園大学教授）と講読し、後に、同君と共訳出版することになった（邦訳『エコフィロソフィー—21世紀文明哲学の創造—』法蔵館 1999年）。

改めて言うまでもなく、地球温暖化をはじめとする種々の由々しい環境問題は、全世界的な規模で、私たちのライフスタイルそのものが原因となって引き起こされている。しかもその根底には、必然的に環境問題を引き起こさざるを得ない現代に特有の世界観が存在している。それは私たちの科学的な世界観の基礎それ自体と、この世界観から生み出される認識それ自体にある。そして、これまでとは違うライフスタイルを採るためには、これまでとは違う「生き方」だけでなく、これまでとは違う「知り方」をすることも必要である。現代において「科学」が問い直され、「宇宙とは何か」「生命とは何か」「認識とは何か」としきりに問われるのは、古い流行語で言えば、思考のパラダイム変換、これまでとは違った知り方・考え方をするためである。

## 日本におけるエコフィロソフィの展開

エコフィロソフィが日本の学会に登場するのは2001年6月のことである。東洋大学の石井薫教授（経営学部）が哲学の進化としてスコリモフスキーの『エコフィロソフィ』を取り上げ、「今日の地球環境の危機的状況に対応し、さらに宇宙や意識を視野に入れた哲学の再生・進化に応えた秀逸の著作である」と評した（「地球マネジメント学会通信」第39号 2001年6月）。そして、その翌月開催された地球マネジメント学会第8回大会において、同教授は「科学と神と哲学—宇宙と人間をつなぐ意識—」と題する研究発表を行い、その中で再びスコリモフスキーの『エコフィロソフィ』に言及しつつ、そこに見る新たな知見を評価した。

エコフィロソフィのさらなる展開は、尾関周二編『エコフィロソフィの現在』（大月書店 2001年）に見ることができる。序章の「環境倫理学からエコフィロソフィへ」の中で、尾関教授（東京農工大学）は「個々のテーマに限定した

問題を議論する段階から総合的に一つの環境哲学、エコフィロソフィの構築へと展開する必要性がある」と述べ、環境倫理の諸問題をより広い哲学的枠組みの中に位置づける必要を訴えた。先行するスコリモフスキーのエコフィロソフィについては、「共感すべき点も少なくないが、神秘主義的傾向が強く、しかも大きな難点は、社会哲学的視点が全く欠落していることである」と評して、それとは区別されるべき新たなエコフィロソフィの構築を示唆した。

エコフィロソフィの最も新しい展開は、昨年（2006年）6月、東洋大学に開設された「エコフィロソフィ学際研究イニシアティブ」（Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy 略して TIEPh）である。ここでは三つの研究ユニットが組織され、新たなエコフィロソフィ構想が立てられている。この構想には大いに期待が持てる。第一は東洋思想の立場から新たな自然観・人間観、自然と人間の関係、共生への視点が究明されること（自然観探求ユニット）。第二は価値に関する人間の意識の現実が明らかにされて、共生を展望したサステナビリティの実現が図られること（価値意識調査ユニット）。第三は人間の意識の変革や社会システムの変革に関する動態が解明されて、これまでとは違ったライフスタイルの提言が行われること（環境デザインユニット）。以上3点への期待である。

## エコロジーと宗教

人は誰でも「生きる」ということを問題にして、それでは「何が」生きるのか、「こころ」が生きるのか、それとも「からだ」が生きるのか、という常識的な疑問から出発する。そして古今東西の莫大な知識の中で「こころ」と「からだ」の二元論を吟味し、その結果、「こころというものはどこまでもからだに即したものであり、さらに、そのからだというものは社会的連関の中に生きているもので、さらにもっと目を馳せれば、宇宙的連関の中にあるものだ」という結論に達するだろう。このように、「生きる」ということを問題にして、もしも私たちが「生きるいのち」を大切にし、からだの死に反対する気持ちを抱くとするならば、私たちは深く宗教に関わっている。また、さらにはエコロジーにも関わっていく。例えば、子どもが川で死んだ魚の浮いていたことを話せば、

親は子どもの骨にストロンチウム 90 が含まれているかもしれないと感じて痛みを覚えるだろう。自然の破壊がこころとからだの死を意味することを知って、痛みのこころを共有するからである。これは「コンパッション」、宗教でいう「慈悲」「慈愛」のことである。大地とともに苦しむことによって、「慈悲」「慈愛」の輪を大きくひろげていく。「慈悲」「慈愛」の体験者となってはじめて自分が何者であるかを知るようになる。そして痛み苦しみの中で、痛み苦しみの共有者として、自分ひとりだけが癒され、救済されることはできないと考えるようになる。なぜか？「いのち」は他との繋がり・連帯・支え合いの中で「いのちのネットワーク」を作っているからである。ここに私たちの現実的な本質部分がある。私たちは生命システムの中の一部なのである。

キリスト教が「古い我に死んで、新しい我に生まれ変わる」と言うとき、また仏教が「我の放下」とか、「自我(エゴ)から自己(セルフ)への解脱・解放」と言うとき、まさに、このことに関係している。人間がエゴ中心的な自分の正体を見抜いたとき、「ああ、悪かった」と悔いて、意識に根本的な変化を起こす。それは人間のみならず、人間以外の他の生命への関わり方や、それに対する責任感の持ち方の変化となって現れる。この変化のことが、いまスピリチュアルなもの、霊性的なものと言われ、「霊性・スピリチュアリティの自己発見」ということが人びとの関心事になっている。

思い返せば、幾年か前、研究先のイギリスで、霊性の自己発見の旅をしている熟年のアメリカ人牧師夫妻と出会ったことがある。「過剰な物質生活の中で、私たちは日々、忙殺されています。自分を顧みるひまがありません。自分自身を見失ってしまっているのです。そのことに気がついたからでしょうか、いま、無性に飢えを感じるのです」と言って、ふたりは古い修道院や礼拝堂を巡礼していた。経済的な関心だけに基づいた物質生活は空虚であり、この空虚感を埋めるために、宗教的なもの・霊性的なもの・スピリチュアルなものが求められている。そして、そこにエコロジーが深く関わってくるのである。

「霊性の自己発見の旅」をすませた牧師夫妻は、その後、私にこう知らせてきた。「私たちにとって、いま霊性・スピリチュアリティとは〈沈黙〉＝聞くことであり、〈従順〉＝神に従うことであり、〈祈り〉＝許しを受けることであり、〈コミュニティ〉＝和解することです。つまり自然に対して、自分に対し

て、コミュニティに対して、密接な関係を回復することにより、いま癒し・ヒーリングを感じています。ですから、この場合の「密接な」という意味は、〈密接〉＝〈霊性的〉＝〈自然的〉という、イコールの関係にあるように思われます。この手紙を読みながら、私ははじめて夫妻と交わした会話のことを懐かしく思い起こしていた。あのとき「いのちのルーツは神との〈密接な〉関係にある」といわれて、「その〈神〉はどんな神か」と私はききかえした。今でなら、夫妻はためらうことなく、神は「超越にして内在」「私たちは神のうちに生き、動き、かつ存在している」と答えるだろう。深く目覚めた人の霊性・スピリチュアリティの発露がここにある。

## 共生と連帯

思うに、宗教とは、もともと自然の中であって、自然のいのちと一体となる経験から展開してきたのではなかったか。大きないのちに生かされて、私のいのちは生きている。私は生かされて生きている。ああ、ありがたい。「いのち」について、このように自覚させるのは宗教である。中でも、仏教は自然との関わりが非常に深い。昔から日本人には仏道と自然とがふたつながらにして、ひとつの救いの道であったようだ。高僧の書に「仏に従って、逍遙して、自然に帰す」とある。「逍遙」とは悠々自適の生活をすることであり、「自然」というのは、この高僧にとっては阿弥陀さまのことではなかったかと思う。

自然は「大きないのち」である。私たちは皆この「いのち」によって、生かされて生き、動き、かつ存在している。この「大きないのち」の占める場所は大地であり、地球であり、宇宙である。その場所において生きている大きな自然と、私たちをも含むさまざまな生命体とが相互依存的に、相互関連的に支え合って生きている。その場所では、あらゆる生命体が不可分の関係にあるから、生命的な存在連鎖のゆえに、生命中心のエコシステムが成り立っている。したがって人と人だけでなく、人と人でないもの、即ち自然と人間との間にも共通の存在意義が生じてくる。ここに成立するのがエコロジーという「共生」という考えである。さらに、この「共生」を可能にするのが生命中心のエコロジカルな価値観である。実はこの価値観のもとで、自然との繋がりを回復する癒し

の思想、ヒーリングの思想が成り立つのである。なぜなら「ヒーリング」のもととの意味は、「ばらばらな部分が一つの全体になりきること」だったからである。

キリスト教もまた「共生」を抜きにしては語れない。キリスト教の創造物語によれば、人は神に似せてつくられた。イマゴ・デイ (imago Dei)、神の似像である。だから、人には独自性がある、固有性があるといわれる。これは人として生きる存在の意味を神との関わりにおいて物語ることを意味する。しかし人は土から生まれ、土を耕し、土に帰るものとしてつくられた。ここに大地との連続性、あるいは自然との連続性がある。これは人として生きる存在の意味を他の生命体との運命的な連帯性において物語ることを意味している。したがって人間の固有性と自然との連帯性はコインの裏表の関係であって、この関係のもとで環境や共生を論じることが現代のキリスト教思想では重要になっている。そして自然の他の生命体と連帯しつつ自らに課せられた責任を果たすということが人間の重要な在り方として問われている。キリスト教のこの新たな認識の下では、人間は本来的に「地の支配者」ではなく、「地の僕」なのである。つまり大地に配慮し、自然の世話をする「神のシュワード」だったのである。確かに人間は、この大地に生み育てられ、他の生命体と共生し、運命的な連帯性のもとにある。したがって、この新たな自己認識によって、人間は新たな生き方へと向かわせられるのである。

## シュワードシップ

キリスト教の神は創造と受肉の神である。創造 (creatio) において自然を超越するが、受肉 (incarnatio) において自然に内在する。神は人となって「この世に満ち満てるもの」となったのである。ここに sacramental なロゴスの成立する根拠がある。自然物は聖化され、神の心を物語る。例えばキリスト教徒が水によって洗礼を受けるとき、あるいはパンとぶどう酒をキリストのからだ、キリストの血として拝領するとき、自然物の中に sacramental なものを感受する。目に見える自然的要素を通して目に見えない神の恩寵、神の恵みを享受するのである。

現代イギリスの聖職者・生物学者のアーサー・ピーコックは「創造は神の中のこの自然的世界において存続している」という (Arther R. Peacocke, *Creation and the World of Science*, 1979. 邦訳『神の創造と科学の世界』新教出版社 1983)。創造と受肉の神は世界の全プロセス「において (in)、とともに (with)、のもとで (under)」現臨している。だから、世界の全プロセスに対して尊敬と畏敬の念を求められるのである。自然的世界の要素は神の内在的な創造活動のゆえに神鑽仰の礼拜に加えられる。こうして物的世界は神聖視され、「存在への畏敬」の念が呼び覚まされるのである。

現代アメリカの神学者サリー・マクファークは「世界は神の現臨の場である」「宇宙は神のからだである」という (Sallie McFague, *The Body of God: An Ecological Theology*, SCM Press, 1993)。マクファークのエコロジカルな感性は、神学に対して、ナザレのイエスとの関係において受肉を相対化し、宇宙との関係において受肉を最大化することを要求する。こうして救済圏を拡張し、自然界をも包摂できるようにするのである。このように神の現臨を最大化して理解することは、人間だけが神の救済行為に関係するのではなく、被造物全体が神の救済に与るように招かれているという認識へと導くためである。何ものも神に見捨てられることはない。これが、神の現臨の場という意味において宇宙が「神のからだ」(the Body of God)といわれるゆえんである。キリスト論からすれば、これは「宇宙的キリスト」(Cosmic Christ)の原意である。

スコリモフスキーはエコロジカルなヒューマニストの立場から「世界は聖所として認識されるべきである」という (『エコフィロソフィー21世紀文明哲学の創造—』法蔵館 1999)。世界は、私たちにとって、かけがえのない住処であり、私たちの文化と精神的滋養の源である。だから野鳥保護区の稀有な野鳥のように、世界もまた大事に保護されなければならないのである。その意味で、世界は聖所なのである。私たちが畏敬の念に打たれ、聖性を維持し、霊性を増大することのできるのはこの聖所においてである。このような崇敬を浸透させ、これを実践することは、私たち人間が「聖所の祭司」あるいは「神のスチュワード」であることを意味する。

思うに、自然的世界に対するスチュワードシップの涵養はエコロジカルな生き方の基本であり、モラルの根本である。それは実践的な生物学者であるエコ

ロジストのものであり、また環境倫理の基礎的原理を提供するものである (R.J. Berry (ed.), *Environmental Stewardship: Critical Perspectives - Past and Present*, T&T Clark, London, 2006)

## おわりに

「現代人は所有中毒にかかっている」と驚くべき診断を下したのは、アメリカの社会心理学者エーリッヒ・フロムである (Erich Fromm, *To Have or To Be ?*, 1976. 邦訳『生きるということ』紀伊国屋書店 1977 年)。何でもかでも自分の手の中におさめなくては気がすまないのが現代人である。これは「肥えたブタ」、つまり量をむさぼり肥えふとる愚者の姿である。ちなみに言えば、「幸せな中流家庭の持ち物調査」という奇抜な社会調査がある。子ども二人のハッピーな四人家族の持ち物調査である。大きい持ち物、小さい持ち物、すべてを庭に持ち出して数えてみると、アメリカのハッピーな家庭は 5200 点、インドは僅か 22 点、日本は何と 8000 点に及んだという。この調査から分かることは、「持つこと」「所有すること」と、「幸せである」「幸福である」ということとの間には相関関係がないということである。日本人が追い求めてきた豊かさ、幸せというのは、実は、所有欲に繰られた物量だったのである。

1970 年代の早い時期に、イギリスの経済学者シューマッハーは「スモール・イズ・ビューティフル」ということを言った (E. F. Schumacher, *Small Is Beautiful*, 1973. 邦訳『スモール・イズ・ビューティフル』講談社学術文庫 1986 年)。これは現代の極端な物質中心の経済を批判して、これに代わるものは仏教経済学だということを言おうとしたものである。仏教は持つこと、所有することを否定しない。しかし所有は最小限に抑えて、そこから最大限の幸福感を引き出していく。その精神性にシューマッハーは着目し、現代人の経済的関心を、暮らしの量から質へと転換させようとしたのである。そうすることによって、大量生産・大量消費・大量廃棄・大量資源の収奪という現代人の大量志向に歯止めをかけ、来るべき時代のニーズは経済成長ではなく、サステナビリティであることを先駆的に示唆しようとしたのである。

「サステナビリティ」は簡素な生の形態に結びつく。現代の流行語で言えば、

ロハスであろうか。それはともかくとして、宗教者は「少欲知足」（欲を少なくして足るを知り）、簡素に生きる。ちなみに言えば、物質中心の科学的発展の傍流にはいつも簡素に生きようとする人びとがいた。環境思想の先駆者ソーローやエマソン、小さいキリスト教の宗派であるクエーカーやアーミッシュ、メノナイトの信者たちはみなそうであった。彼らはモノ、カネ中心の近代アメリカに抵抗して、できるだけ自給自足の生活、自然な生活を保持しようと心がけた。言うならば、彼らは肥えたブタではなく、痩せたソクラテスであった。簡素な生の形態の中に暮らしの質を高め、簡素に生きようとする賢者たちであった。

「足るを知る者は富む」と東洋の智慧は教える（老子）。西洋の智慧は「肥えたブタではなく、痩せたソクラテスであれ」と教える。量をむさぼって肥えふとる愚者ではなく、質を求めて考える賢者であれと教える（ジョン・スチュアート・ミル）。

いま、あなたは肥えたブタですか？

それとも、痩せたソクラテスですか？

## 付記

本稿は東洋大学「エコフィロソフィ学際研究イニシアティブ」の国際シンポジウム「今、地球を維持する哲学とは？ —エコフィロソフィを求めて—」（2007年10月13日 於、東洋大学）において発表したものである。当日はパワーポイント使用による発表であったため、本稿の全内容に言及するものではなかったことを付記しておきたい。